様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月１４日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９３２０００５
研究課題名（和文）　エコノミー概念の倫理思想史的研究

研究課題名（英文）　Ethical-historical study of the “economy” concept

研究代表者
麻生　博之（ASOU HIROYUKI）
東京経済大学・経済学部・准教授
研究者番号：５０３１７９０５

研究成果の概要（和文）：本研究は、「エコノミー」という事柄を、その概念史をふまえながら、倫理をめぐる原理的問題として考察し、諸々の研究領域を横断する新たな倫理学的視座を模索することを課題として、研究会等での多様な議論を通じて実施された。その結果、従来十分に明らかにされてこなかった「エコノミー」の概念史に関する包括的な視座を獲得し、その概念的実質について一定の知見を得た。また、そのような知見に依拠しながら、「エコノミー」と倫理をめぐる原理的な諸問題の所在を、いくつかの現代的事象や現代思想等に関わる個々の論点にそくして明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined the concept of "economy" which had the long history of usage from Aristotle via theology to the modern meaning of economics. What we call "economy" should be taken as a fundamental problem in the domain of ethics that is crossing with the diverse disciplines of studies. To inquire into that enormous and various works requiring study, we managed some seminars to have discussions and to clarify the perspective of this concept. As a result, we acquired a coherent comprehension along the long history of this concept, which, in fact, has not been thematized up to this time. We clarified in the end the essence of the fundamental problems around the "economy" and ethics throughout the individual issues concerning some modern phenomena and modern thoughts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	3,300,000	990.000	4,290,000
２００８年度	3,000,000	900,000	3,900,000
２００９年度	3,300,000	990,000	4,290,000
年度			
年度			
総　計	9,600,000	2,880,000	12,480,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学，哲学・倫理学
キーワード：エコノミー，倫理学，哲学，社会思想史，経済学，経済学史，経済と倫理

１．研究開始当初の背景

「エコノミー」は元来、「家政」を意味した古代ギリシアの「オイコノミア」がそうであったとおり、人々の間の関係を規定する「倫理」と深い関係にあるものであった。そのことは、近代以降、個々人の「私的」な「欲求の関数」によって規定される市場の論理が、翻って個々人の行動様式を「社会化」したこと、また、欲求の関数を解析する純粋科学を標榜する新古典派以降の経済学の方法自体が、一種の規範として「よき生（Well-being）」の領域に浸透するに至ったこと等の事態において、なかば暗黙のうちに、とはいえより広範な形で現出しているといえる。

そのような事態をすぐれて対自化し、「エコノミー」という事柄を広く「倫理」との関係において問い直す試みは、たとえばアマルティア・センのそれのように経済学内部で模索されていると同時に、フーコーやドルーズ＝ガタリ、レヴィナス、デリダ等の現代思想において「エコノミー」が問題とされる際にも、より広範な射程から原理的な形で試行されている。

ただし、「エコノミー」を「倫理」との関わりにおいて批判的に問い直すそれらの試みは、経済学、社会学、哲学といった個々の学問領域を超えて共通の地盤でなされているとはいいがたく、またそもそも、本来問われるべき「エコノミー」概念そのものが、専門領域や論者ごとに多様な仕方で用いられ、それぞれの文脈に応じて曖昧な形で使用されるに止まっている。

このような状況をふまえ、「エコノミー」という事柄を、その概念史をふまえながら、倫理をめぐる原理的問題として思考し直してみること、そしてそのことによって、従来連携の乏しかった「エコノミー」と「倫理」に関する諸研究の間に共通の地平を獲得し、新たな倫理学的視座を模索すること、この点に本研究の関心があった。

２．研究の目的

(1)　「エコノミー」として漠然と語られる事柄に通低する概念的な基礎を、「エコノミー」概念の込み入った概念史に遡りながら、また様々な学問領域を横断しうる形で明らかにし、そのことによってこれまで以上の学際的な対話の可能性を開くこと。

(2)　「エコノミー」と名指される領域を概念的に捉え直すことを通じて、我々が意識せぬままそのうちに住まっている生と思考の構造について批判的に検討し、我々の「より善き生」を思考するための原理的な視座を明らかにすること。

(3)　「経済」をめぐるこれまでの倫理学的議論に関しても、「エコノミー」の概念的基盤に広範な検討を加え、その倫理性そのものをも問い直してみることにより、既存の「経済学」の枠組み自体を相対化し、いわば対処療法的な議論にはとどまらない、「経済と倫理」に関わるいくつかの新たな視座を呈示すること。

３．研究の方法

まず、各々の研究分担者・研究協力者等が各自の専門領域にそくして「エコノミー」と「倫理」の関係に検討を加えることを一つの基盤とするが、同時に、研究会やワークショップ等を頻繁に実施し、議論の深化をはかる。具体的には、各々の研究成果を共有しつつ、総合的に討議を重ねることで、各自が課題として取り組む研究相互の連関を批判的に検討し、異なった領域の問題を共通の地平の上に見通しながら、「エコノミー」概念が関わる倫理学的な問題について考察する。なお、各研究分担者等が到達した研究成果と研究会等における諸議論の成果は、「研究紀要」等の形でとりまとめ、広く公開する。

４．研究成果

(1)　本研究では、各研究分担者・研究協力者等がそれぞれの専門領域で研究を進めるとともに、複数回、研究会を実施し（2007 年度は３回、2008 年度は 2 回、2009 年度は 3 回）、また 2008 年度からは「エコノミー」の概念史の研究に特化した分科会を集中的に実施した（2008 年度は 7 回、2009 年度は 8 回）。それらの研究成果の一端は、本報告書の補足という位置づけで刊行した「論集」にとりまとめた（「エコノミー概念の倫理思想史的研究〔課題番号 19320005〕平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書・補足論集」、2010 年 3 月、全 241 頁）。同「論集」は、第１部として研究分担者・研究協力者の研究論文を収め、第２部「「エコノミー」概念・原典資料集」には、上記の分科会における研究成果として、「エコノミー」概念の錯綜した概念史を多様な原典からの引用の集成という形でとりまとめた（同「論集」、119 頁‐237 頁）。なお、同「論集」は、全国大学の主に哲学・思想系の講座等に献呈し、いくつかの大学等の図書館でも閲覧可能である。（同「論集」を希望する方がいれば、本研究の研究代表者に、その所属機関である東京経済大学を通じてお問い合わせいただきたい。）

(2)　本研究の研究成果は、その内容面から言えば、主として、①従来十分に明らかにされてこなかった「エコノミー」の概念史に関する包括的な視座を獲得し、その概念的実質について一定の知見を得たこと、②そのような知見に依拠しながら、「エコノミー」と倫理をめぐる原理的な諸問題のありかを、いくつかの現代的事象や現代思想等に関わる個々

の論点にそくして明らかにしたこと、という２点にまとめることができる。
①　今日、日本語で「経済」と訳されることの多い「エコノミー」という語が、元来は「家政」を意味したギリシア語「オイコノミア」に由来することはよく知られているが、「経済」という語で想定される事柄と「オイコノミア」というギリシア語が意味していた事態の間には、容易には埋めがたい間隙が存している。ごく広い意味での「家」を「秩序」（タクシス）に適った形で「管理・統治すること」を意味したオイコノミアは、いわば神による「宇宙」の秩序だった統治というストア派における意味の拡大、また題材の秩序づけられた「配置」という弁論術・修辞学における意味づけを経ながら、キリスト教思想のうちで重要な意味をもつ概念となった。そして近世において、キリスト教思想を一つの背景としながら、とりわけ「自然のエコノミー」、また「アニマル・エコノミー」（動物的生を維持するための身体の組成）等々への拡張を経たうえで、とくに 18 世紀後半以降の「ポリティカル・エコノミー」をめぐる多様な錯綜した議論を通じ決定的な意味の限定が行なわれることになる。本研究では、上記の「「エコノミー」概念・原典資料集」で示したとおり、「エコノミー」の概念史を以上のような総体的・通覧的な形で把握する視座を獲得するとともに、そうした概念史に通底する「エコノミー」の概念的基礎が、いわば「家長」（家父であれ、神であれ、統治者であれ、個々人が有するとみなされるある種の「合理性」であれ）による、「家」の境界内のものごと、そして時間的な、あるいは有限なものごとに対する秩序だった「統治」を、またそれらのものごとを無駄なく巧妙に配置する調和した「秩序」そのものを、さらにはそうした統治が可能であり、そうした秩序が存在するとみなした上で、そのありようを探ろうとする実践的／理論的な「学」の形態を意味する点にあることを明らかにした。
②　「エコノミー」という事柄が、以上のようなごく広い意味で捉えられ、実際にそうした意味で暗黙のうちに機能してきたかぎり、「エコノミー」を想定し、それを求めることは、単に「経済」という語から想定されるよりも、はるかに広範な、また根深い形で、生の現実と思考を、そして人と人との関係のあり方を規定しているといえる。それゆえ、たとえば「エコノミー」が仮に何らか必要であるとして、それがいかなる意味で、またどのような根拠から求められるべきなのか、あるいは、それによって抑圧され排除されるものが何であり、その外部はそもそも／いかなる意味で可能なのか、そうした問いについて思考することは、すぐれて「倫理」をめぐる原理的な思考の課題となる。本研究では、主にこうした観点から、（上記「論集」所収の各論考で詳論されているように、）一方では、「身体」、「自己保存」、「労働」、「生存」、「欲望」等の事柄との関わりにおいて、他方では、トマス・アクィナス等の中世の神学思想、ライプニッツやカント等の近世哲学、またレヴィナス、デリダ、フーコー、ラカン、ドゥルーズ＝ガタリ等の思考に内在的な論点との関わりにおいて、「エコノミー」をめぐるいくつかの原理的問題の所在と輪郭を明確にした。
(3)　①本研究で得られた成果の意義、②今後の課題と展望としては、おもに以下のような諸点が考えられる。
①　「エコノミー」の概念史に関わる研究には、個々のテーマや特定の時代に限定したものは、すでに（とくに国外において）多くの先行研究がある。たとえば、アリストテレス等の古代ギリシア思想における「オイコノミア」、キリスト教思想における「オイコノミア／エコノミー」、近世における「自然のエコノミー」や「アニマル・エコノミー」等の概念に関する個別的研究は数多く存在し、またわけても「ポリティカル・エコノミー」の形成史をめぐっては経済学史研究における膨大な蓄積が存在する。しかし、テーマや時代を限定せずに、「エコノミー」の概念史を包括的・通覧的に捉えようとする試みには、ほとんど前例がない。この意味で、本研究の研究成果には大きな意義が認められるといえる。つまり、ストア派の思想、キリスト教思想、近代の形而上学や諸々の自然学、古代以来の修辞学や芸術思想等における「オイコノミア／エコノミー」概念を考察対象としながら、それらとの関連のうちで、近代以降の「ポリティカル・エコノミー」や「モラル・エコノミー」の諸概念、また 20 世紀以降の様々な現代思想における「エコノミー」概念の内実をトータルな形で把握しようとする試みには、国内はもとより国外的にもほぼ類例を見ないといってもよく、その点で本研究は、概念史研究としても、「エコノミー」概念そのものの実質を考察する研究としても、少なからぬインパクトをもつものと考えられる。また、本研究で得られた以上の成果は、哲学・神学・生物学・経済学・政治学・芸術学等の多様な学問領域を横断して、共通の問題設定のうえに、「エコノミー」をめぐる問題を検討するための基礎的な視点を開くものともなりうるはずであり、その点にも本研究の意義が認められるといえる。
②　ただし、本研究には、その課題設定に照らして、なお多くの課題が残されてもいる。まず、概念史研究に限定していえば、今回の研究では、全体として概括的な考察に止まらざるをえなかったことだけでなく、個々の点で、なお十分に考察できなかった領域、また

問題としては気づきながらも、ほぼ手をつけられなかった問題圏が残った。たとえば、中世神学における「dispensatio」「dispositio」等の概念の内実、中世から近世にかけての広義における「家政学」の実相、近世当初（ルネサンスや宗教改革）におけるいわば「オイコノミア／エコノミー」の復興の内実、近代「自然法」をめぐる錯綜した議論と「（自然の）エコノミー」概念との関係、「ポリティカル・エコノミー」をめぐる 18 世紀後半の入り組んだ論脈、現代の諸々の「エコノミクス」におけるエコノミー概念の実相、等については十分に検討ができなかった。これらの個々の領域・問題圏の検討も含め、「エコノミー」の概念史をより立ち入った形で包括的に考察することが、今後の課題の一つとなる。そしてまた、今回の研究では、概念史の研究を通じて得た知見を、諸々の現代的事象や現代思想等における「エコノミー」の問題の分析と十分に関連づけて活かしきるところまでは至らなかった。詳細な概念史研究と密接に関連づけながら、倫理に関わるすぐれて原理的な問題として、さらには狭義の「経済と倫理」をめぐる議論にも深くコミットする形で、「エコノミー」という事柄を諸々の現代的事象にそくして考察し、それに立ち入った分析を加えることが、今後のさらなる課題となる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１８件）

①浅見克彦、身体のエコノミー、エコノミー概念の倫理思想史的研究〔課題番号 19320005〕平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書・補足論集、査読無、2010、2‐19
②荒谷大輔、Économie libidinale dans le monde économique : formation de la souveraineté chez J. Lacan、エコノミー概念の倫理思想史的研究〔課題番号 19320005〕平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書・補足論集、査読無、2010、67‐77
③城戸淳、弁神論における幸福のエコノミー――ライプニッツのオプティミズムからカントの最高善へ、エコノミー概念の倫理思想史的研究〔課題番号 19320005〕平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書・補足論集、査読無、2010、44‐56
④中真生、初期レヴィナスにおける「女性的なもの」(le féminin) と「存在のエコノミー」、エコノミー概念の倫理思想史的研究〔課題番号 19320005〕平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書・補足論集、査読無、2010、78‐92
⑤馬渕浩二、労働と生存のエコノミー、エコノミー概念の倫理思想史的研究〔課題番号 19320005〕平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書・補足論集、査読無、2010、20‐33
⑥城戸淳、神の現存在の宇宙論的証明に対するカントの批判について、人文科学研究（新潟大学人文学部）、査読無、125 号、2009、1‐31
⑦浅見克彦、Being the Skin、表現学部紀要（和光大学）、査読無、8 号、2008、157‐170
⑧麻生博之、歴史の連続を打破する意識――ベンヤミンにおける歴史意識の概念とヘーゲルの歴史哲学をめぐって、東京経大学会誌（経済）、査読無、259 号、2008、215‐230
⑨荒谷大輔、Moral intending Desire――Essay on the function of "God" in Deleuze‐Guattari、Communications & Society、査読無、vol.18、2008、162‐170
⑩中真生、レヴィナスにおける主体の両義性（ambiguïté）について――『全体性と無限』を中心に、現象学年報、査読有、24 号、2008、61‐68
⑪中真生、ヨーロッパにおける他者の思想――レヴィナスの「創造」をめぐる考察を軸に、シェリング年報、査読無、16 号、2008、25‐39
⑫馬渕浩二、私的所有の外部――Ｐ・セレーニ『マルクス――人と物』を読む、人間・自然論叢（中央学院大学）、査読無、27 号、2008、1‐16
⑬熊野純彦、自己超越する思考、大航海、査読無、62 号、2007、104‐111
⑭熊野純彦、〈語ること〉と〈語られたこと〉とのあいだで、実存思想論集、査読無、XXII 号、2007、5‐28
⑮熊野純彦、〈権利〉と〈平等〉をめぐる断章、シリーズ・ヒトの科学、査読無、6 号、2007、87‐104
⑯熊野純彦、知と行動の「外部化」が意味するもの、査読無、77 号、2007、845‐849
⑰熊野純彦、原型と反復 ―― 和辻哲郎における「子ども」の視点、査読無、哲学雑誌、794 号、39‐57
⑱中真生、苦しみと希望 ―― レヴィナスの思想から、緩和ケア、査読無、17 巻 5 号、2007、407‐410

〔学会発表〕（計１０件）

①城戸淳、弁神論における幸福のエコノミー――ライプニッツのオプティミズムからカントの最高善へ、哲学／倫理学セミナ

ー・第 62 回例会、2009 年 12 月 19 日、文京区民センター
②城戸淳、カントにおける幸福のパラドクス――幸福主義批判と最高善とのあいだ、日本カント協会・第 34 回学会、2009 年 11 月 21 日、立正大学
③麻生博之、「エコノミー」概念の思想史的再構成に向けて、哲学／倫理学セミナー・第 57 回例会、2009 年 5 月 23 日、芝浦港南区民センター
④荒谷大輔、経済論研究の射程――近世自然概念革新との関係を中心に、哲学／倫理学セミナー・第 57 回例会、2009 年 5 月 23 日、芝浦港南区民センター
⑤城戸淳、神の現存在の宇宙論的証明に対するカントの批判について、カント研究会、2008 年 11 月 30 日、法政大学
⑥荒谷大輔、生の実在を論じること――『創造的進化』における認識論と存在論の交錯、日仏哲学会、2008 年 9 月 13 日、東京大学
⑦荒谷大輔、Why is a word transmitted as "Commandment"? : Essay concerning the "Social Desire" in Deleuze-Guattari、International Society for Study of Religion, Nature and Culture、2008 年 1 月 20 日、Morelia、Mexico
⑧中真生、ヨーロッパにおける他者の思想、日本シェリング協会、2007 年 12 月 9 日、日本女子大学
⑨中真生、レヴィナスにおける主体の両義性（ambiguïté）について、日本現象学会、2007 年 11 月 11 日、大阪大学
⑩麻生博之、「目覚め」としての歴史意識――ベンヤミンの歴史哲学をめぐって、日本ヘーゲル学会、2007 年 6 月 17 日、名古屋市立大学

〔図書〕（計１６件）
①馬渕浩二、ナカニシヤ出版、倫理学の地図（篠沢和久・馬渕浩二編、「第 5 章 倫理空間の地形図」を馬渕が単独執筆）、2010、145‐174
②浅見克彦、青弓社、ＳＦ映画とヒューマニティ――サイボーグの腑、2009、260
③麻生博之、中央公論新社、日本哲学小史――近代 100 年の 20 篇（熊野純彦編、「梅本克己「人間的自由の限界」」を麻生が単独執筆）、2009、280‐287
④荒谷大輔、中央公論新社、日本哲学小史――近代 100 年の 20 篇（熊野純彦編、「田邊元「社会存在の論理」」を荒谷が単独執筆）、2009、256‐263
⑤冠木敦子、中央公論新社、現代哲学の名著――20 世紀の 20 冊（熊野純彦編、「デリダ『法の力』」を冠木が単独執筆）、2009、224‐233
⑥城戸淳、東北大学出版会、人文学の生まれるところ（栗原隆編、「哲学――観念論とはなんだったのか？」を城戸が単独執筆）、2009、31‐49
⑦馬渕浩二、中央公論新社、現代哲学の名著――20 世紀の 20 冊（熊野純彦編、「レーヴィット『共同存在の現象学』」を馬渕が単独執筆）、2009、162‐171
⑧馬渕浩二、中央公論新社、日本哲学小史――近代 100 年の 20 篇（熊野純彦編、「戸坂潤「空間論」」を馬渕が単独執筆）、2009、222‐229
⑨麻生博之、岩波書店、岩波哲学講座・第 6 巻・行為／モラルの哲学（熊野純彦ほか編、「他なるものと倫理」を麻生が単独執筆）、2008、187‐232
⑩麻生博之、中央公論新社、哲学の歴史・第 10 巻・危機の時代の哲学――現象学と社会批判（野家啓一編、「Ｘ フランクフルト学派　２アドルノ」を麻生が単独執筆）、2008、587‐620
⑪荒谷大輔、講談社、西田幾多郎――歴史の論理学、2008、229
⑫荒谷大輔、岩波書店、岩波哲学講座・第 6 巻・行為／モラルの哲学（熊野純彦ほか編、「欲望する生産のモラル――ドゥルーズ＝ガタリにおける「規範倫理」の可能性」を荒谷が単独執筆）、2008、119‐139
⑬荒谷大輔、ドゥルーズ／ガタリの現在（小泉義之・鈴木泉・桧垣立哉編、「資本主義のリビドー経済――ドゥルーズ＝ガタリにおける「経済学批判」の可能性」を荒谷が単独執筆）、2008、246‐269
⑭冠木敦子、岩波書店、岩波哲学講座・第 6 巻・行為／モラルの哲学（熊野純彦ほか編、「法と他者――レヴィナスにおける「エコノミー」」を冠木が単独執筆）、2008、141‐163
⑮城戸淳、岩波書店、岩波哲学講座・第 6 巻・行為／モラルの哲学（熊野純彦ほか編、「理性と普遍性――カントにおける道徳の根拠をめぐって」を城戸が単独執筆）、2008、57‐75
⑯城戸淳、東北大学出版会、形と空間のなかの私（栗原隆編、「カントの空間論・序説――身体・開闢・感情」を城戸が単独執筆）、2008、55‐78

６．研究組織
(1)研究代表者
麻生　博之（ASOU HIROYUKI）
東京経済大学・経済学部・准教授
研究者番号：５０３１７９０５

(2)研究分担者
浅見　克彦（ASAMI KATSUHIKO）
和光大学・表現学部・教授
研究者番号：１０１７５８５４

荒谷大輔（ARAYA DAISUKE）
江戸川大学・社会学部・准教授
研究者番号：４０４０６７４９
冠木敦子（KABUKI ATSUKO）
桜美林大学・法学・政治学系・講師
研究者番号：００３６９４１４
川本隆史（KAWAMOTO TAKASHI）
東京大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：４０１３７７５８
（H19→H20～：連携研究者）
城戸淳（KIDO ATSUSHI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：９０３２３９４８
熊野純彦（KUMANO SUMIHIKO）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：００１９２５６８
（H19→H20～：連携研究者）
中真生（NAKA MAO）
神戸夙川学院大学・観光学部・准教授
研究者番号：００４０１１５９
馬渕浩二（MABUCHI KOUJI）
中央学院大学・商学部・准教授
研究者番号：７０３６００８９

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：